



『もし、ちゃんと聞いていますか？あなた、このようなかわいらしく可哀想な素チンをお持ちの人間の男のあなたにもわかるように説明しているのですよ？』

僕は何を聞かされているのだろう。僕はしがない鬼殺隊の平隊員だ。任務に向かわれたのち連絡が途絶えた蝶柱・胡蝶しのぶ様の搜索の任についた二人だ。鎧鳥の『コチョウシンノブハイキテイル』という情報に、囚われているなら少しでも早くに開放してさしあげたい……そんな気持ちで他の隊士や隠から一人先行してしまつた結果がこれだ。

へソより上までソリかえつたながうい、あつうい、カリがプ厚うい、えぐうい……それでいて女の子の肌特有の、みずみずしさ……すべてブルブルさが同居する……

そんな鬼の女が携えたイチモツとかいう凡そ理解ができないものの話――

密かにあこがれていた女性の口からそんなことを語られる華奢なカラダに似つかわしくないものとも大きめに感じられた乳房はさらにパンパンに膨らみ、ツンと上を向き、細く麗しかった腰は、お腹は大きくまると膨らんで、それを愛おしそうに撫で上げる……

全てにおいて脳が理解を拒むそんな状況で、一体何があつたのですかと思わず僕が問うたのは当然ではないだろうか。

彼女は何か嬉かつたのだらう。さらに鬼の女との蜜月を詳しく語れるからだらうか。ぼくのイチモツを足で撫で上げながら、しのぶ様は笑顔を咲かせ言葉を紡いだ。



『私は鬼に……あの方に土の字にて拘束されました。あ触手でですよ。一面触手の、まるでなにかのお腹の中といった様相です。最初は私も深い怒りと不快感に包まれました。しかしそれを上回る快楽に包まれてしまったのです……♡おまんこ♡そしてケツの穴のなかまで……♡体中触手に包まれ……♡このクチの中から何度か何度か深い快楽に無理やり押し上げられました……♡』

愚かなだつたあの頃の私は……そうですね。必死に耐えて……不遜に笑みを浮かべ……何と言つたでしょうか……「これしきのことて鬼殺隊の柱をどうにかできると思うのか」とか「血鬼術から趣向まで何もかも気味の悪い鬼だこと」などと挑発的な態度を崩さぬよう勤めたんですよ。

でも私のいやらしいお豆さん……あれもあの方に言うよう駄けていたんだんですよ。陰核では味気がないですからね。それをツブツブがびっしりの触手でわねめさんごとと反り擦り上げられてはカラダを大きく跳ね上げ……

……イボイボの生えた茨のような触手やたくさんの舌が生えた球がいくつも連なった触手……そして細やかな触手がびっしり生えた回転する触手で徹底的にケツの穴を舐めほじくり倒されてはおおおと無様な声で鳴き……

乳房を舐めしやぶられ乳首をぞりぞり回し擦り責められ……そして私のおまんこの形に合わせイボの形をグニグニと変える………とんでもない触手おちんぼさんで未熟なおまんこを何日も何日も丁寧に丁寧に開発され続けてしまいましたから……

私はあの時一体どんな顔をしていたんでしょうね？いつ頃まで笑顔を保っていたのでしょうか……

そんなこと言われたって僕にわかるはずもない……けど僕はぐちゃぐちゃに笑顔を崩され鬼にその顔を笑われる………そんなじのぶ様を想像してしまいイチモツを硬くしてしまつた……

「いや、触ってみたいが……」

ついに：ついには：一番聞きたくないことばに……。憧れの人がはじめてを……

つかうた膜自体は破られ、膣内を徹底的に犯されていたことはこれまでの話でわかった。

憎むべき鬼の……しかも女に……そんなチンポに彼女が貫かれ屈服する話がはじまった……。

「そしてですね……聞いていますか？聞いていますね。おちんぼが悦んでいるのが脚に伝わってきますから。こんなにちつぽけなのに主張だけは随分と雄大で……素直で無様ですね♡」

これとは比べ物にならない大きくて気持ちよくて……ああこれは最初に話しましたね。でもあの方のおちんぼの素晴らしさは何度話してもいいですから……♡

まあその素晴らしい鬼のふたなり雌ちんぼに擦り上げられ彼女の上で顔からカラダから隅々まで……涙とヨダレと汗と愛液をまき散らしながら跳ね続けて……一体どれほどの日時が経つたでしょう。

彼女は決して私を本イキはさせませんでした。浅い切ないイキだけが何度かさせて下さって、愚かな私は触手に比べて随分下手な女だと思っていました。

身は疲れ蕩けきり、気力も誇りも削がれ果て、最後に残った僅かながらな心を自ら捧げさせるための手ぬるい愛撫だと気づいたのはもう限界が近くなつてからでした。♡

心底鬼の膛内射精を請うのなら本気で犯していあげろ。さあ膛内射精を、妊娠を請いなさい

そう囁かれたと彼女は言った。何が『私はどうしたと思いますか？』だ。その大きな大きな腹を見れば一目瞭然じやないかそんなの





そんな女の鬼の唇に、その柔らかそうな唇を重ね、舌をからませ必死に貪りお互いの唾液で顔をべちゃべちゃにしながら膣内射精を請うたに決まっているじゃないか……

そんな事を考えている僕に彼女はにつこり笑って

『半分正解ですよ♡ぐちゃぐちゃによい媚びるように、ねだるように、私はあの方のお口を囓りました♡でも結局言われたんですけどね♡膣内射精をくださいって♡』

私は鬼を殺すというたくさんの罪を犯しました。鬼を殺した分だけあなたが私を食べてください。私の卵子を貴女の精子で食らってください。おまんこをほじくりイカせたり子宮をこじ開けて精子を注ぎこみ犯したり。

その屈服の悦びに目覚め切った時彼女の罪は許される。
そんな事を言ったのか、言ってしまったのか……

『そう……言ってしまったんです……そしてイッてしまったんです♡それはもう、深く♡深ああく♡憎かったはずの鬼であるあの方に、未熟ではありますが腰を合わせて……股を開いて調子合せて……チンポ迎えて……子宮開いて……♡慎ましいお嫁さんのように♡』

そんな私を見るとあの方は嬉しそうに更にチンポを長く硬くさせ……私をリードして下さり何度も何度も腰をうちつけ……何度も何度も射精してくださいました……♡♡』



それからその腹がこんなに大きくなるまで……鬼の仔は成長が速いのか十月十日は経っていないのだが……何か月もそのまんこでちんぽを喰えこみ続ける日々を送りまぐわい続けたのだろうか

彼女はそんな日々を思い出して股をもじもじ、腰をくねらせ大きなお腹を揺らして昂っている。誇り高き蟲柱は影も形もなくもう本当に鬼の奥さんになってしまったんだ

そんなことを考える僕のイチモツはガツガツに硬くなってしまい、昂って早くなっていた。彼女の脚は、それに気づいたのかさらに速度を上げる。

「この状況でこんなに硬くて……とてもないマソチンボさんですね……♡」
もしかして懂れていましたか？ 私のこと、自意識過剰でなければ……好きでした？
気持ちいいのですね？ ああ……でももうこんなおちんぽでは私満足できないんです♡
あの方専用の蟲柱まんこ……蚯蚓のようにうねりにうねらせるとっても気持ちいいおまんこは使わせてあげられませんので

せいぜいこの脚まんこで我慢してくださいね♡まあでもあの方が帰ってきたら殺されて食べられてしまうのにこんなに先走って、私の脚を汚しているドMちんぽには脚で十分……お似合いですね♡

ホラ♡いきなさい♡鬼殺隊のはしくれの癖に鬼の嫁に堕ちたみじめなメス豚に踏まれて情けなくイけ♡」

そうなのだ。俺はこのあと鬼に食われて死ぬのだ……なのに……
『人生最後の射精がこの量だなんて(笑)』と笑われ、彼女の足の甲をちよろっと汚ただけだが、胡蝶しのぶの脚まんこに存分に射精した僕は、人生最後にして最高の快楽に打ち震えていた













